

千葉県銚子駅なので銚子までの切符をもらった。

十二月二十六日、南風崎駅をあとに、貨車はすし詰めであるが、東京品川駅に着いたら夜になった。

二十七日、千葉の戦友とともに千葉駅で下車し、千葉寒川に親戚があるからと戦友鈴木一さんと一緒に行って二泊した。

食糧不足の折りにもかかわらず大御馳走になり、鈴木さんとともにシベリアの苦勞話をした。

家へは電報を出したので、二十九日午後三時ころ銚子駅に着くと親戚や弟妹が迎えに来ていた。

親戚の方に駅前であいさつをして別れ、母親と弟妹とともに渡し船により波崎町に着いた。

渡し船場に父親が迎えにきていた。午後四時ころ懐かしい我が家に帰宅し復員となった。昭和二十一年十二月二十九日で軍隊生活を終わる。

【執筆者の紹介】

現住所 茨城県鹿島郡波崎町九三八〇

本籍地 茨城県鹿島郡波崎町九三八〇

生年月日 大正十年二月二十一日

入 隊 昭和十七年三月一日

最終所属部隊 北支派遣衣第四二九八部隊第一中隊

終戦時の居住地 北朝鮮咸興郊外

入ソ日 昭和二十年九月二十五日

抑留地 ウラジオストック セミヨノフカ

作 業 伐採

引 揚 昭和二十一年十二月二十九日

引揚船 永祿丸

上陸地 佐世保

(茨城県 府馬 正治)

ヤ・ホンスキー

石川県 大坂 喜久治

黄塵にまみれて

昭和十八年一月、現役兵として金沢から遠く満州国

北安省チチハルに送られ、砲兵隊に入隊して一年後、

新編成の「迫撃第十五大隊」の一員として中支に出陣した。

命令のままに各地を転戦し、十九年四月からは第三次長沙攻略戦に参加、衡陽・桂林を陥れ、さらに南方粵漢打通作戦と、激戦に明け暮れた一年余りに兵力は半減してしまった。第一線を退いて上海まで下り、本土防衛を命じられて朝鮮半島を南下したが、敵潜水艦の横行で故国へ帰港の望みは絶たれ、北鮮に戻って威鏡南道の威興師範学校に仮の宿が定められた。戦塵を洗って休養がてら初年兵の教育などに従事していたが、平安の日々は長く続かなかつた。

日本が負けた

二十年八月九日、突如ソ連軍が侵攻して来た。寝耳に水とはこのこと、事態は悪化する一方で、わが部隊も十四日に出発、一日行軍で定平の山中に到着、翌早朝から陣地構築に汗を流している時。

「日本が負けた」という噂が流れて来た。一瞬愕然としたが、敵が流したデマに違いない。「誰だ、そんなことを言う奴を連れてこいッ」と騒然とするばかり。

しかし、陛下の玉首放送があつて、降伏が事実だと知らされた時の衝撃、周囲を見渡せばただ呆然とした顔ばかり。一同虚脱したようになって、それぞれがあれを思い、これを憂いて、まんじりともできぬ一夜を過ごした。これからどうなる、誰にもわからないまま、山の陣地から威興へ戻ってきた。

武装解除

上からの指示で書類はすべて焼却。武器は中学校の校庭に出す。我々が丸腰になった途端、住民は暴れるようになった。逃げられるだけ逃げようといって密かに部隊から姿を消した者、民間人の服装に変えた者など様々である。この連中は後日、三十八度線で捕らえられたり、日本人狩りに合つてみな連れ戻された。部隊が貨車に乗せられた時、初めてソ連兵なる者にお目にかかった。顔色、毛色まぢまぢで物珍しく、皆長途の戦旅で汚れたなりをしている。

定平の練兵場の仮小屋に收容される。他部隊も次々送り込まれ、在留邦人もドンドン入ってくる。邦人は松林の中の幕舎にアンペラ敷きの中で寝起きしている。

有刺鉄線が張り囲らされ、その外側をソ連兵が歩き回っている。

ソ連兵の悪行

どさくさにまぎれ込んで来るソ連兵、夜ともなれば明かりのない邦人の幕舎に侵入して来て、女とみれば年齢の見境もなく強姦暴行を繰り返す。悲鳴が聞こえ、それと知りながらどうすることも出来ぬ我々の口惜しさ。自分の非力、不甲斐なさをこれほど痛感したことはなかった。ソ連兵の毒牙から逃れようと、若い女たちは髪を断って丸坊主となり、戦闘帽、軍服姿になる。

その変装も見破られるようになると、女たちは夜毎、我々の兵舎に逃げ込んでくる。

冷たい土間にうずくまる彼女たちに、かける言葉もなかった。

東京ダモイ

いよいよ「日本へ帰す」という噂が飛んで、ソ連の女医による身体検査が始まる。千名単位の大隊に編成されて、十月七日出発、興南の港に向かう。将校は分

離されて、これが別れとなった。ソ連兵がトラックに戦利品、糧秣を山と積んで我々を追い越してゆく。飛行機のエンジンまで積んで、大声でまくし立ててゆく。(このしゃくに障ることがこれから何十度、何百度と起こるわけだが、敗者の我々には応酬する一言の言葉もない)

途中、在留邦人が集まってお茶など接待して下さる場所に寄る。口々に慰勞の言葉をかけてくれる。先に帰る我々に何故こんなに「ご苦労さま」と言ってくれるのか、と不審に思わぬでもなかったが。

翌日の晩方、山のような戦利品と共に貨物船に乗せられ、着いた港はウラジオ。荷下しに一日かかる様子。監視兵は「トウキョウ トウキョウ」と言って笑っている。

ソ連軍に一発の弾丸も撃たなかったわが部隊は「出港までにウラジオの町を見物させてくれるようだ」と言い出す兵隊も出てきて、「明日は日本へ」と一同楽観ムードで出港を待っていた。

シベリア入り

波止場に降りた途端に、貨物列車が入ってきた。おかしいぞ、と言っているうちに、わからぬ言葉でがなり立てられて貨車に詰めこまれ、ガラガラ、ガシヤリと銃をかけられる。誰の顔も蒼白、判断のしようがない。

やがてガタゴトと動き出した。レールの継ぎ目がいやに頭にひびく。窓一つない貨車の中は足の踏み場もない。停車すると屋根の上をバタバタと歩き回る音。節穴から覗くと広野の真ん中を走っている。

三日三晩、誰も口をきく元気もなくなつたころ、降ろされたのは五、六軒の家が見える小さな駅だった。野原の真ん中に毛布一枚で野宿である。どこからか寄ってきた住民、兵隊や将校までが、時計、万年筆はないか、パンと交換だと手真似で交渉が始まる。彼らはどんな生活状態なのだろうか。

一夜明けて行軍が始まる。八キロほど行くごとにまばらな住家の部落があるだけで、広野の広さに途方に暮れる。やっとなるところに着くと、今度は林ばかりをあてどもなく行く。秋風の木の葉が散る中を、

ソ連兵の罵声、時にはむやみに銃の引金を引いて実弾をぶつ放す。小用を足すのも命がけ、風に散る木の葉よりみじめな思いについ涙が流れる。

マトベーフカ收容所

「ダワイ、ダワイ、ビイストラ」(早く、早く、ボヤボヤするな) という意味のロシア語を一番先に覚えさせられて、行軍の何日目だか、小さな流れを渡って着いた所が目的地、マトベーフカ(マッチベフカ) 收容所だった。(後日調べたところでは、ウラジオから北へ直線距離で百五十キロほどだが、ハバロフスクへ向かう本線を、マンゾフカで右折して東へ約二百キロ、セミョノフカ地区内の一寒村であった)

百メートルに百五十メートルほどの広さで、二重に有刺鉄線で囲まれ、四隅の高い櫓には歩哨が四六時中、自動小銃を抱え立っている。門は両開きで、横に小さな潜り門があり、そこから一人ずつ中へ入れられる。刃物を持っていないか、と先ず携行した私物検査が行われるが、その実、彼らが欲しくてたまらないのは別物で、万年筆、時計、安全剃刀、眼鏡、石けん、それ

に布地物は風呂敷、タオル、寄せ書きの日章旗、着替えの越中褌まで、見つけ次第取り上げる。私も腕時計をバンドを外してズボンの股下に縫い込んでいたが、取り上げられてしまった。

バラックの内部は、中央に土間を奥まで通し、両側に細い丸太の柱を建て並べ、柱に打ち付けた横木に板を渡して寝台とする。天井まで二段に造られ、上段の者は座れば天井に頭がぶつかると。窓は小さく、隅にペーチカが一つ。もちろん電灯はない。後で聞けばこゝは、囚人部落で、刑を終えてもある期間他所への転住は許されないという。

我々から取り上げた時計をはめて喜々としている者の、日の丸の旗をネッカチーフにしている婦人、みなご機嫌で無邪気そのものである。作業で部落内を通つた某日、越中褌をひもでぶら下げて食器拭きにしているのを見て、なるほどいいアイデアだなあと感心した。入所して二日間は食糧もなく、じゃがいも掘りの手伝いに出て、畑でナマのままかじる始末であった。

伐採作業

十一月に入って本格的な作業に入った。伐採である。二人引きのピラ（鋸）とタポール（斧）をわたされて、五葉松の生い茂つた森に入る。馴れない鋸曳き、枝払い、運搬と、歩哨にからかわれ、追い回されて右往左往する明け暮れは、肉体的にも精神的にも突につらい。一本の丸太に十五〜六名もかかって動かさねばならぬほどの体力の衰えと飢えのつらさ、気温は冬に向かつて零下を下がる一方、加えて風土病に侵される者も出て始めて、体力、氣力の尽き果てた者から死んでゆく悲劇が今日も、明日もと続くようになる。

ノルマ

戦後、日本にも「ノルマ」という言葉が使われるようになった。シベリア抑留者がどれだけその「ノルマ」に泣かされたか。聞くに怖気が立つ言葉である。ノルマの達成と食糧の増減に、毎日神経をかき乱されたが、日々支給される黒パンの分配についても、大の男が目の色を変えて、一分一厘大きさを争う悲喜劇が演じられた。

どこのラーゲリ、バラックでもそうだったと思うが、

黒パンを裁断するための手製の物差しが、またスूपを等分するための秤が、分隊ごとにつくられたことからみても「食べ物の恨み」がいかに凄まじいものか想像に余りある。分配に時間がかかって冷えてしまったスूपをすすり、やっと手にしたパンの一片をガツガツと頬張ってしまうもの、一つまみづつち切ってはゆっくり味わう者、人それぞれだが、電灯がなくて代わりにコイ松（松脂しみこんだ内皮部）を灯すので、顔も室内も油煙で真っ黒。暗闇の中で食を楽しむしほしの静寂は異様なものであった。やがては、闇の中で他人の物に手をのばす、さながら生き地獄も展開されるようになる。

シラミ

作業に出るのは、毎朝人員点呼をすましてからである。全員を五列縦隊に並べ、タラス、ドバと教えてゆくのだが、計算に弱いソ連人は、途中まで来て混乱し、また第一列からやり直すことが屢々だった。寒い中を毎朝一時間近く立たされるのはやり切れなかったが、その間に、前にいる者の背中にシラミが動いているの

が見える。シラミをかゆいと思うのはまだ虫が少ないう間だけで、上衣の外まであふれるほどになると、ただ左右の手で無意識にかいているだけである。前の男の背にシラミが見えるということは、自分の背中も同様である。たまに飯盒でシャツや襦を着沸してみるが、布団にも毛布にもいるから効き目は少ない。

飯盒は食器でもあり、シラミ退治の鍋でもあった。その上、南京虫の襲撃は毎夜欠かさずにあったから、虫に弱い兵隊の被害ははかり知れなかった。

シベリアの元日

昭和二十一年、帰国の当てもないままに祖国に向かって還す。

「我々には祖国再建という新たな闘いが待っている。その意味で今年は待望の年である。今は一人残らず元気で、そして一日も早く故郷に帰り、祖国再建に励む日を持つばかりである」

これが、船渡川隊長の年頭の挨拶である。

もちろん隊長にしたところで、日本に帰るめどがついているわけでもない。しかし、今となっては故郷に

帰ることだけが我々の生きる希望であり、心の支えでもある。

皆を励ます隊長の意中は痛いほどわかりながら、何を聞いてもただ空しいばかり。一切の新聞、ラジオなどニュースは断ち切れ、罪人ならば刑期もあるが、我々は無期徒刑同然、この先、生かされるや殺されるやお先真つ暗だ。中支の戦線では死ということに悔いはなかったが、こんなシベリアの果てまで来て、殺されてたまるか、何が何でも生きて帰らねばと、一枚の毛布にくるまって、涙を流しながら自分を励ました。

煙草

お酒は我々風情には配給されるはずもないが、せめて煙草ぐらいはという望みも叶えられそうもない。そこで兵隊の苦心は、イタドリやヨモギの葉を乾かして喫ってみたが駄目。ソ連人は「マホルカ」という刻み煙草を、新聞紙を千切った小片に巻いてすうのだが、その香たるや煙草に飢えている我々にはたまらない。その吸殻をねらって、捨てた途端に、殺到する。怪しげなロシア語で頼んでおくと、吸いさしをくれる人も

いた。煙草好きには恥も外聞もない。秘そかに隠し持っていた万年筆も、とっくにけむりになってしまった。(昨年、シベリア墓参に行つた友人に頼んでおいたマホルカを、やれ懐かしやと一服してみたが、とても吸えたものではなかった。)

作業に慣れないうちは、倒木の下敷きになる者、それがもとで一命を無くす者が絶えなかった。凍傷患者も多発した。トラックで遠くの作業場に向かうとき、指先、足先が溶けていくような痛みを覚え、吐く息にマツ毛が凍り、防寒帽の頬あたりは白く凍る。夜間作業のトラックの積込みは最も危険で、手足の感覚も萎えて夢遊病者同然、ただ惰性でうごめいているのだ。作業が終わって帰るころは、五寸ほどの倒木もまたげず、足と足がからんで転がるという情けなさであった。一たん体調を崩すと死の危機に直結する。ソ連側の女医が認めない限り、作業に追い出される。高熱患者と外傷患者は休ませてもらえるが、医薬品とて皆無に等しい。重症者はトラックで何処かへ送られたが、再び元気で戻ってくる者はいなかった。

食い気

人間誰しも先ず食うことだ。最悪の状況に追い込まれると、人はその本性が現われるというが、確かに、あの人が、この人がと一目置かれていた人が意外にブザマで醜い姿を露呈する。

血気盛りの若者にはつきものの色気話は全く聞かれず、馬糞を見ても煉瓦クズを見ても「アッ黒パン」と連想するほど餓鬼のように成り下がりが、食べたい食べたいと寝るまで食い物の話ばかり、そして朝には冷たくなって死んでいる。

目覚むれば友はむくろの横顔を

明日は我が身とまぶた閉ずるなり

長嶋 正吾

寒さも辛い、最低の逆境にどうにもならない欲望が重なって、それを誰にも訴えようのないみじめさ。寒夜に無心に照る月を見ても憎らしくなり、梢にさえずる小鳥にさえ無性に腹が立ってくる自分が、一層哀れに思えてくるのだった。

入隊から復員まで、ずっと一緒だった荒屋敷君は同

郷で無二の親友である。二三日彼の姿を見かけなかったので聞いてみると、下痢をして寝ているという。それは大変だ、見舞ってやらねばと思ったのは瞬間、今、彼は何も食べられないだろう、パンは俺にくれる、彼と俺の仲だ、きつと貰える。これが正直、私の本心だった。餓鬼に墜ちると無二の親友もあつたものでない。

松ヤニを灯した暗い中に、汚れた毛布にくるまわっている彼を見たら、さすがにパンをくれとは言えなかった。彼でなくとも、もらった食糧は死んでも放さないのが、あのときのみんなの気持ちだった。

三月、四月、漸く春の兆しがみえ始めると、落葉の下から若草の芽が出始める。

どんな草でも、誰かが試食したと聞けば、競って摘み取り、飯盒のスープに加えて量をふやす。ある日、代燃車の薪用に雑木を倒していたら、その枝の芽を牛が食べている。これはいける、と仁丹粒ほどの芽を取って、飯盒の蓋で煎って食べていると、ところを監督にみつけられて大目玉を食った。馬鈴薯植えの作業は大

歓迎だったし、ソホーズやコルホーズ（集団農場）への手伝いでも食べ物にありつけることがあった。ある日、農場へ行った兵隊が、古い蓄音機を見せられて「こんな物、日本にあるか」と問われ、無いと言ったら、訳のわからぬ歌曲の類を半日近くも聞かされ、帰りにパンをもらってきたという話。自転車やブルドーザを見せて、こんなのあるかと自慢気な問い。とんでもない、ブルドーザは「小松製作所」とあり、トラックはアメリカ製の刻印がついているではないか。

ヨロベ収容所

マトベーフカ収容所（第三分所）では一年近くの伐採でほとんど伐り倒したので、北へ四十キロほどのヨロベ収容所（第八分所）へ移動した。まず兵舎造りからで、自分で自分の逃亡を防ぐ有刺鉄線の二重張りは全くなさけない。女医の診断で、第三級の病弱者はリズコー（第四分所）に送られ、マトベーフカは閉鎖された。

ヨロベでは引き続き伐採で、夜ともなれば裏の山で熊の鳴声がある。元下士官の数人がどこかで教育を受

けて来て、共産主義教育をやり出す。労働で疲れ切つて帰ってきた夜分、集合をかけられて講義を聞かねばならぬ辛さ。拒否すれば反動分子の烙印が押される。満州にいた元憲兵、元警察官の連中は摘発されて、いづれかへ消えて行く。給与やノルマで苦しめられているその上に、思想の強制、教条の押しつけに、精神面でも針でつつき回されるような明け暮れであった。

入所して一年もたつとロシア語の片言もわかるようになった。とはいえ、文字は覚えられず怪しげなロシア語とゼスチュアで結構通じる。ソ連兵が日本兵を侮蔑する一つ覚えの日本語は、ハラキリとサムライで、苦し紛れに何をし出すか分からないといった潜在恐怖感があるのか、自動小銃を手放せなかった様子である。

二度目の正月

二十二年元旦、シベリアへ来て二度目の新年を迎えた。ソ連側の政治部将校によれば、三月から日本人の送還が始まるという。

それも作業成績の良い者から、というただし書きがついている由。子供だましと思っても、帰りたい一心

から、にわかには活気づいて作業に取り組んだが、上がる一方のノルマには追いつけそうもない。一時の熱もさめると、また四月説、五月説が流れてくる。その間にも望郷の夢も空しく死んでゆく者もある。

埋葬は、半日焚き火をして、堅い土をやわらげ、ツルハシや鉄棒で石を刻むようにつついて、やっと頭部や肩がかくれるくらい掘ればよい方、薄く土をかぶせるだけで哀れな別離となった。

帰国話

四月になると帰国話が濃厚になり、明日はリズコーの病弱組が帰るといふ情報が入った。次は我らだとい

う。
事実、明くる日、作業休みの我々の前を通って帰国していった。それから三日たっても五日たっても気配はなく、またも当てが外れてものも言えぬ落ち込みようだった。

雲二つ 逢わんとすれば又遠く

離れて消えし 春の青空

戦前の一首が想い出される。あれだけの期待が浮雲

と共に消え失せてしまった。心中を季節外れの秋風が吹き抜ける。たとえ上陸して二三日で死んでもいいから帰りたい、と思ひ詰める。短い夏も過ぎて九月、十月、また冬を越さねばならぬかと諦める。

冬来たりなば春遠からじ これを念仏のように心中に繰り返して春を待った。

三度目の正月

遂にシベリアで三度目の正月を迎えた。

せめて元日だけでも箸で食べる堅い飯が食べたいと、皆で相談して一か月前から少しづつ溜めた食糧で、飯と何種類かのお菜ができ、今年こそはと御馳走を前に励まし合った。

それにしても日本の政府、日本共産党は何をしてい

るのだろうか。不平不満、憶測が囁かれるが、ソ連の悪口は絶対に言えない。誰かわからぬが、我々の中に告げ口をする者がいるからだ。
二月、三月とまたも帰国話がもち上がり、雪解けが待ち遠しくなってくる。四月に入るとその話にも真実味が加わり、本格的になった。出張していた者が呼び

戻され、作業もキリをつける仕事ばかりで「四月二十日に出発」という確報がアツという間に拡がった。乾草を詰めた敷布団や枕の返納。被服の交換も終了、心ははや万里の彼方、故郷に飛んで、お互い笑顔で肩を叩き合う始末であった。

帰国取消

ところが、もう二晩で出発という四月十八日、帰国話は突然取消になった。これほど見事に背負い投げを食ったのは初めてだ。お祭騒ぎが葬式に一変したように、一同呆然自失、口をきく者もない。

二三日たつてセシヨノフカに近い（北へ二十キロ）第二ワルフオロメイエフカ駅前（第五分所）へ移された。送ってきた将校が慰め顔に「あと二、三か月の辛抱だ」と言ってくれるが、誰がそんなことを信ずるか、嘘つきとひがむ一方。ここはシベリア支線の一駅で、貨車が入ると徹夜でも材木の積込みをやらされる。

セシヨノフカ周辺の日本兵はどんどん帰っていると聞く。また、駅前では他部隊が露営して帰還列車の来

るのを待っているのを見れば、やはり近いうちに帰れそうだという希望も湧く。いよいよ七月六日出発との指示が出る。もうだまされんぞ、今度こそは本当らしい、思いが干々に乱れて、何事も手につかぬ数日が流れた。

ナホトカへ

貨車の中に乾草を敷いて、その夜は貨車の中で明かし、翌朝七月六日、三年振りに乗る汽車は動き出した。今までの苦しみが後へ後へと吹き飛んで行く。途中の駅々には日本兵がいて、ナホトカは満員で、逆戻りさせられたとこぼしている。不安の中にも三日目、ナホトカに着く。

各分所は多くの部隊で満員の様子。「資本主義粉碎」「天皇制打倒」といった看板やプラカードが張り囲まれ、聞きしに勝る思想教育に一驚する。使役に出る者はみな革命歌や労働歌を合唱しながら歩いている。共産教育の最後の仕上げをやるうという方針らしい。入浴に行ったとき、「この部隊は思想教育がなつたらん。このままでは資本主義日本への敵前上陸はさせん

ぞ」と怒鳴られる。薄氷を踏む思いで、やっと第二、第三分所へと移ることができた。

日本人が見える

二十三年七月十七日、簡単な復員式が行われた。湾内で船尾に日章旗をなびかせて黒煙をはいっていたのは、引揚船の第一大拓丸である。ランチに分乗して、いよいよ本船に乗船するとき、甲板の船員を見て、誰かが「オウ、日本人が見える、日本人が」

自分は何国人と思っているのか。

甲板へ上ると、小学生の作品らしい書や絵が貼ってあり、「父さん、兄さん待っていました」「永い間、ご苦労様でした」など。

日本の文字を食い入るように読む。新聞もある。本当に帰れるんだ、俗に言う「大船に乗った気持ち」とはこれだ。こんな大きな船に乗ることは生涯ないだろう。

二十日未明、甲板から緑一色の祖国が見えた。日本が見えたと大騒ぎになる。

こうして、私は六年振りに祖国の土を踏むことがで

きた。

終わりに

たしかに我々は「国の為」にたたかいました。だが失ったものは余りにも大きい。私よりももっと激烈な闘いを体験し、もっと悲惨な抑留生活を送られた方々も多い中に、私は九死に一生を得て帰ってこられたことだけが何よりの幸せと感謝しております。

残された命を全うし行動することが、あの戦争で二度と祖国の土を踏むことの出来なかった戦友各位への鎮魂となると考え、心から冥福をお祈りいたします。

【執筆者の紹介】

大坂さんは、木曾義仲の古戦場で知られる俱利伽羅峠の麓にある村の出である。

今は石川県津幡町に合併されたが、ここは「九折」（つづら）という地名で想像されるように、山裾に散在した五十戸ほどの集落である。

筆まめで本好きな大坂さんは、農事の暇々に先年、『九折の郷土史』なる一書を上梓されたが、加賀と越

中を結ぶこの地は戦後、北陸線鉄道やトンネルの改修、また国道・高速道路の建設などで、静かな山村にも新生活文化の波が押し寄せ、年毎に洗濯機、冷蔵庫、テレビが普及してゆく様子が具体的に示されていて興味深い。

車は各戸に二台づつが普通で、息子と嫁さんは近くの金沢市やその他に勤めに出て、大坂さんのような老夫婦は「三チャン農業」を余儀なくされているが、ことに印象深いのは、戦前の部に「昭和〇年〇月〇日 何某 中支で戦死」と戦没者が列記されているのと対照的に、戦後は「〇年〇月〇日 何某 自動車事故で即死」といった記録がつづられていることで、一家の柱、働き手の不慮の悲劇が、今も絶えないのは暗然とするばかりである。

大坂さんは九死に一生を得て帰還され、余生を抑留体験者のため、戦友会のため、また隣人、町のために尽くされているが、兵隊の時は、迫撃砲大隊という「助っ人部隊」で、今日はあちらの歩兵連隊、明日はこちらの旅団へと助勢に出、散々こきつかわれて戦友

は半減した。やっと落ちついたところが北鮮という運の悪さ。ソ連に抑留されるために来たようなものだが、三年の辛苦に堪えて帰還されたのは、その人徳の致すところであろうか。ますますご自愛を祈ってやまないものである。

(石川県 永井 正三)

私の捕虜生活

—北鮮とシベリアと—

鳥取県 八津川 美 明

はじめに

「平和の礎」は副題の「シベリア強制抑留者が語り継ぐ労苦」が示すとおり、シベリア抑留記がほとんどであるのは当然のことながら、私にはシベリア抑留と同じくらい、入ソするまでの北鮮での捕虜生活の思い出が強く残っているので、それについても触れることとした。

終戦から三合里収容所に入るまで